
堕ちた勇者は、苦しみにあがく

林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

堕ちた勇者は、苦しみにあがく

【Nコード】

N4402Z

【作者名】

林檎

【あらすじ】

勇者とはなにか？

答えをもとめ、

堕ちた勇者は旅にでる……。

序章

その勇者はかつて、世界を手に入れようと人々を苦しめた、恐ろしい魔王を倒し、世界に平和をもたらした……。

そんな話がある。

しかし、彼は。

絶望と憎悪にまみれて育った、彼は。

ただ、こういった。

「笑わせるな……誰もが憧れる英雄……？」

今は亡き勇者の前で、ただ、こういった。

「何が、勇者だ」

悲しみ？

喜び？

怒り？

彼には、もう感情はない。

勇者の物語は、今日から大きく変わる。

悪を倒すため？

世界に平和をもたらすため？

「そんな綺麗事は、もう、いらない」

勇者とは、何か？

これは、そんな彼が勇者として、あかく物語

第一話「堕ちた勇者と永久のヴァンパイア」

人通りの少ない路地裏で、フードを目深にかぶった女が、数人の男に囲まれていた。

「……………」

女は、無言で男達を避けて逃げようとする。しかし、男のうちの1人に腕を掴まれ、逃げる事ができなくなってしまった。

数人の男達はニヤニヤと笑いながら女を見る。

「嬢ちゃん、すっげーぺっぴんだな。さっきフードからちよつと顔が見えたからな」

「俺達と今から、今からいいことしようぜ」

「大丈夫だ。痛いようにはしないからよ」

女は、小さな声で何かをブツブツと呟いた。

「おいおい、何いつてるのか分からねえよ、嬢ちゃん」

と、男のうちの1人が、何かを呟いている女の肩に触れようと手を伸ばしたその瞬間、ヒュン！ と風切音をあげて、何か細い物が男の伸ばした腕にささり、貫いた。

一瞬の出来事で、腕を貫かれた男は、一瞬ポカんと腕を見ていたが。「ぎゃあああー!？」

痛みに悲鳴をあげて、男はその場から逃げていった。

他の2人の男は、その様子を見て顔面を蒼白にし、一目散に逃げ去っていった。

その場には、女しかいない。

女は、キョロキョロと辺りを見回すが、他に誰かがいるような気配もない。

試しに、呟いてみた。

「誰……………」

すると、それに答えるかのように、空から声が返ってきた。

「…………俺だ」

「……………！」

女が驚いて空を見上げると、そこには……………。

「……………っ！」

なんと、大蛇のごとき炎が、女に噛みつくように迫ってきていた。

「炎……………？」

普通の人間なら、そこで、その炎に焼かれて死んでしまうだろう。

……………ただ、それが普通の人間じゃなければの話だが。

女は、ニコリとも笑わない表情で、こういった。

「生憎、私にはどんな魔法も聞かないわ」

女は、炎をよけることなく全身で受け止めた。そして、あつという間に炎に包まれた女を、大蛇のごとき炎は、燃やしつくす……………はずだった。

しかし、勢いよく燃えていた炎が、いきなりすうっと消えてしまい、女は、最初から何もなかったかのように、ケロリと立っている。まるで、炎が女に吸収されたようだった。

「さて、こんなつまらない悪戯、私が誰か分かっててしたのかしら？」

女は、後ろを振り返る。

「悪戯じゃない。あれは本気でお前に発動した魔法だ」

そこには、年の頃は18〜19だろう男がいた。漆黒の髪に、感情が伺えない瞳、中肉中背の体には、黒衣を着ている。そんな男が、女を見据える。

女は、妖艶な雰囲気を漂わせて微笑む。

「私に何かようなの？まさか……………無謀にも、私を殺そうとした？」

男はそれに、

「お前の力を試した。……………永久のヴァンパイア」

女は微笑んだまま、「私のことしてるの？」

「あんなに噂が回ってるんだ。嫌でもしってるさ。まあ……………噂に値する力の持ち主であったようだな、ヴァンパイア」

女は、初めて、フードをとった。男とあまり年が変わらないように

見える女は、とてつもない美少女だった。輝くような銀髪をリボンでまとめた髪に、同色の瞳に、華奢でスタイルのいい体、その美しさは、人間には有り得ないような姿で。そう、人間には、有り得ないほどの美しさだった。

「噂……ねえ。馬鹿な人間共は私のどんな噂をしているの？」

「伝説の地に生息する竜を一瞬で倒したり、数千に及ぶ軍勢をたった1人で全滅させたり、あらゆる男を手玉にとったり……いろいろだな」

「確かに最初の2つは事実だけど、最後のは関係ないわね。まあ人間の噂なんてどうでもいいけど」女はさっき男達が逃げていった方を見る。

「あの魔法あなたが使ったんでしょ？」

「そうだが？邪魔だったからな」

「ひどいことするわね」

「あんたも魔法使おうとしてただろう。男になにか言われたとき。

それも、上級魔法を」

女は「へえ？」と笑う。

「あなた、上級魔法の種類をしってるの？」

「ああ。その魔法は俺も使える」

女は、少しだけ驚いた。

「あなた、人間のくせに結構できるようね？さっきの気配のコントロールで私に気づかれないように近づいたのもすごいと思うわ。気配のコントロールは難しいから……ただ」

女は、さっきまでの微笑みを消して、冷たく言い放つ。

「たかが人間の分際で、私を試そうとしてるの？少年」

男は困ったように、しかし感情が伺えない瞳は動くことなく、
「俺はもう少年という年じゃないが……怒らせてしまったなら、悪かった。ただ俺は、あんたとやり合いたいと思ったただけだ」

その途端、なぜか女はボツと顔を赤くする。

「なっ……や、やり合いたい!？」

「……何を勘違いしたか知らないが、俺は、1対1で戦って欲しい
と喋ってるんだが」

女は、慌ててコホンと咳払いし、「分かってるわよ!」といった。

「……俺と戦ってくれるか?」

女は、「人間の分際で私に……」と叫びかけたが、止めた。

少し考えて、女は言った。

「いいわ。戦ってあげる。あなたが私に勝つのは無駄だとおもっけ
どね」

「……ありがたいな」

「ただし!」

女は、男にビシツと指を突きつける。

「この私がたかが人間の言うことを聞いてあげるんだから、あなた
も私の言うことをききなさい」

男は、頷いた。

「分かった。何をすればいい?」

「後で言うわ」

女は、身をひるがえした。が、そこで思いだしたように、振り向く。

「あなた、名前は?」

男は、少し間をあけて、

「……………レジェンだ」

女は、フツと笑って、

「私は、リリス。まあ、東の間よろしくねー」

「ああ」

このリリスの言葉は、後々レジェンを後悔させることになる……………
…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4402z/>

堕ちた勇者は、苦しみにあがく

2011年12月15日01時47分発行